臨死のまなざし

立川昭二

新潮社

241494

日文 701524629

臨死のまなざし

立花昭二

藏

新潮社

臨死（りんし）のまなざし

発行　一九九三年四月一五日

著者　立川昭二（たつかわしょうじ）

発行者　佐藤亮一

印刷所　株式会社光邦

製本所　株式会社大進堂

発行所　郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七一番地
電話　営業03(3266)5111　編集03(3266)5411　振替東京四―八〇八
株式会社　新潮社

装幀　新潮社装幀室

＊価格はカバーに表示してあります

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Shôji Tatsukawa 1993, Printed in Japan
ISBN4-10-364703-5　C0047

臨死のまなざし＊目次

序　章　ギリシアの壺絵に　7

第一章　病いと老い　17

病い、「あらゆる省察の母体」　18

老い、「花より猶上の事」　36

第二章　死に寄り添う　51

「氷を割る」中勘助　52

「月の引力」広津和郎　66

第三章　「死」体験　81

「其間に入り込んだ三十分の死」漱石　82

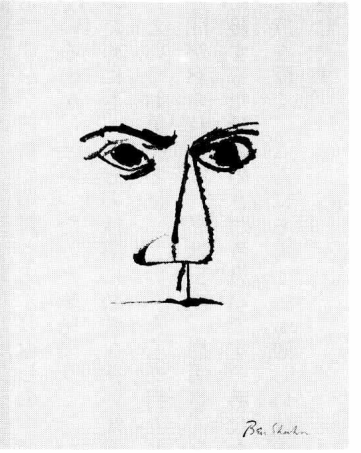
「魂魄なかばからだをはなれた」賢治　98

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第四章　医者の一言　113
「医者に言はれて、だまりし心！」啄木　114
「患者と医者の黙契した辛さ」夢二　128
第五章　看護婦の手　143
「白い着物はすぐ顔の傍へ来た」漱石　144
「なべて且つ耐へほゝゑみて」賢治　160
第六章　ゆらぐ家族　175
家族の踏絵――がん告知・安楽死　176
家から病室が消えて――在宅ケアの原風景　190

第七章　変わる病い　207
時代の病い——肺病・がん・エイズ　208
現代の見えない病い　222
第八章　変わる死　239
「風景」としての死　240
つくられる「死」——脳死　254
終　章　現代の民話を　271
あとがき　284
引用文献・参考文献　286

序章　ギリシアの壺絵に



中扉

ベン・シャーン「リルケ『マルテの手記』より：一行の詩のためには……」より

七頁　扉

一七頁　少年時代の病気を

五一頁　死んでゆく人の枕もと

八一頁　飛ぶ鳥の姿

一一三頁　産婦の叫び

一四三頁　思いがけぬ邂逅

一七五頁　心を悲しませてしまった両親を

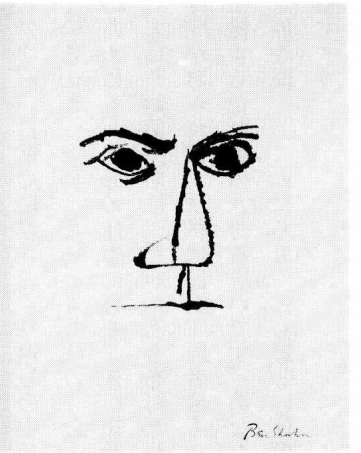
二〇七頁　白衣の中に眠りおちて恢復を待つ産後の女

二三九頁　死者の傍で

二七一頁　一篇の詩の最初の言葉

福島県立美術館所蔵

序章　ギリシアの壺絵に



お便りありがとうございます。

重症心身障害者の施設にお勤めとのこと、それもソーシャルワーカーとしてお働きとのこと、日夜のお仕事は私など想像をこえる激務とご苦労の連続のことと存じます。

「病人、障害者の生活を第一にと働いてる私たちですが、日常の煩雑さのくり返しの中でも、自分が何をやっているのか、どういう時代を生きているのか、といったことを見失うことなく、息長く仕事を続けていきたいと思っています。そのためにも、自分の仕事に必要な狭い知識だけでなく、根を太らせていく糧を得たいと思います」というお気持ちに、たいへん心を打たれました。

私の勤めている大学の病院にもあなた方のお仲間がおられます。私は日頃、患者さんと家族を陰から支えている彼女たちの献身的な働きぶりに接するたび頭のさがる思いです。あなた方のお仕事こそ、病院の内と外、医療と福祉、行政と家族を繋ぐ、こんにちもっとも難しい仕事、それだけにもっとも大切な仕事の一つではないかと存じます。

ところで、これまですでに、脳死、臓器移植、尊厳死、インフォームド・コンセント、がん、エイズ、精神疾患、過労死、老人医療など、個々の問題については勉強されてこられたとのことですが、さらに「そうした問題の全てを包含するのが現代であるとするなら、病いの社会史・文明史からは、現代はどういう時代として捉えられるのでしょうか？」というのが、このたびの私へのおたずねのようです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

これは、たいへん重く大きな問いで、もとより私ごとき者には手にあまる問題ですが、考えてみれば、この問いはこれまで病いや死の歴史をたどってきた私の仕事にとって総括的・終局的なテーマであり、それだけに私としてはもともと避けて通れない問いでもあったわけです。

そこで、あなたのおたずねへの答えになるかどうかはわかりませんが、以下、試みに日本近代の文学作品などをたどりながら、病いと死の歴史から現代を照射するとどのような風景が見えてくるのか、私の眼に映った映像をつづってみたいと思います。

死者の眼、ギリシアの壺絵

ところで、現代の病いと死のありようについてご一緒に考えていくまえに、ここでぜひとも、一枚の絵を見ていただきたいのです。それも、現代日本からは時間的にも空間的にもずいぶん遠い時代と国のものなのですが……。

それは、今から二五〇〇年前、古代ギリシアの小さな壺に描かれた絵です。もう十何年か前のことになりますが、アテネの国立考古博物館の西陽のさす一室で、陳列棚に無造作に置かれたその小さな壺を目にした瞬間、背筋に戦慄が走ったような感動を今も忘れることができません。

高さわずか四二・五センチ、陶製の葬祭用の香油壺。ラベルには前五世紀、エレトリア出土とあります。「出陣する戦士」と題されているように、白地に簡潔な線描きで、戦場に出立する夫と見送る妻が描かれています。

この壺絵のどこに私が感動したのか――。それは、この絵を一目見たあなたもおそらく同じだ

と思いますが、戦場に出立する夫の楯に描かれた大きな「眼」です。

――新婚の妻は晴れ着をういういしくよそおい、椅子に静かに坐り、右腕は背もたれにのせ、夫に兜を渡しおえた左の腕は白いたおやかな腿にそっと置いています。

左手に槍と楯をもつ夫は、右手をのばして兜をしっかり受けとり、離れがたい思いを胸に立ちすくんでいます。すでに妻の視線は死の深淵を越えて遠くに向けられているのでしょうか。

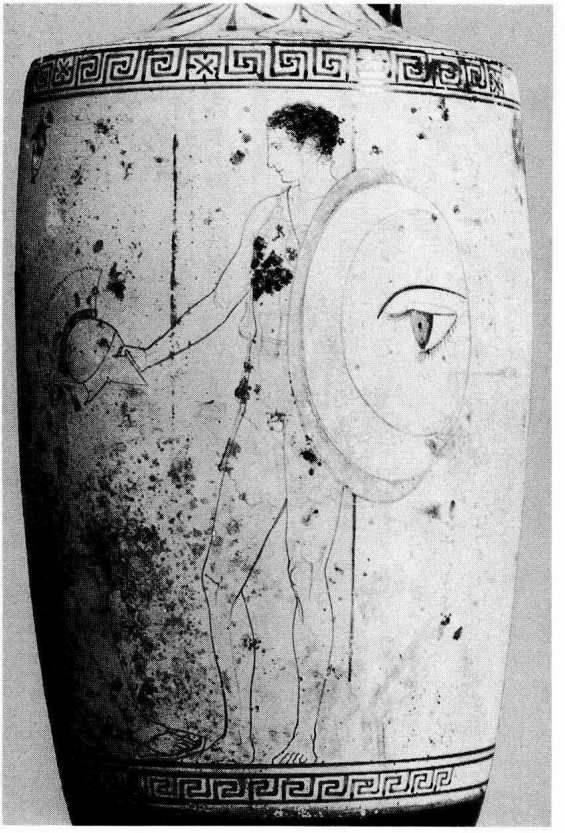
ところが、なんと夫の楯に描かれた大きな眼が、この一瞬おもいきり見開かれたまま、長い睫毛の奥から、ジーッと新妻を凝視しているではないですか……。

いったいこの眼はなんでしょうか？　死してなお妻を忘れられない夫の心の眼でしょうか。それとも生死を超えて永遠を見つめつづける死者の眼でしょうか。

おそらく、ひとがこのような眼を眼とするのは、生と死をわかつ告別の一瞬にちがいありません。しかもなお死者はここにある！　のです。

生と死のはかりがたいあわいを、このようなかたちでとらえ表現した古代ギリシア人の精神の高みを、いったいどう考えたらいいのでしょうか。すくなくとも、生と死の一瞬をこのような深いかたちでとらえた表現を、私はほかに知りません。

いきなり、このような遠い時代の絵をお見せして、さぞかし戸惑われたことと思いますが、あなたはこの「眼」をどのようにお考えになりますか？　あなたのお考えをいずれじっくりお聞かせいただきたく存じます。



出陣する戦士　葬祭用壺　前５世紀　ギリシア
アテネ国立考古博物館蔵

生者と死者のまなざし

ところで、私たちが古代ギリシアの壺絵の「眼」の何に惹きつけられたかといえば、いうまでもなく解剖学的な眼球ではありません。見開かれた眼がジーッとみつめる視線、「まなざし」だったのです。

「まなざし」ということばを、たんなる視線という意味ではなく、思想的に深い意味をもたせて使ったのはミッシェル・フーコーでした。彼は名高い『臨床医学の誕生』（神谷美恵子訳）の序文の冒頭で、「この本の内容は空間、ことばおよび死に関するものである。さらに、まなざしに関するものである」と言っています。フーコーは、近代医学というものはそれまで病人の全体と周囲に向けられていたまなざしが、病人のからだの中の出来事だけに向けられたことによって始まった、と言っています。そういえば、さいきんの医者は患者のからだの内部にまなざしを向けてくれるどころか、患者を前にしていても、眼は検査データやエコーの画像に向けられる時間のほうがはるかに多いのではないでしょうか。

まなざしはフランス語でregard（ルガール）です。このことばは絵画用語で「向い合いの図」のことをいうそうです。このギリシアの壺絵はまさに生者と死者の向い合いの図です。動詞のregarderは、「視る」という意味のほか、「考える」という意味もあります。まなざしを注ぐということは、考えるということでもあります。幽明境を異にする夫と妻が交わし合っているまなざしは、彼らが永遠の世界で交わし合っている心でもあるのです。

じつは、あの「眼」の壺絵が置かれていたのは、古代ギリシア人の墓碑が陳列されている部屋でした。そして、それらの墓碑にもやはり生者と死者とが交わし合うまなざしが見事に表現されているのです。

死者である娘と侍女の日常の遊びの一瞬を刻んだ墓碑、死んだ若い母親と抱かれた赤子を刻んだ墓碑、両親に手を差しのべながら死んでいく少女の墓碑……。そうした名もない慎ましい人びとの哀しいまでに美しい墓碑に囲まれ、私はその部屋に交錯する愁(うれ)わしげな視線や無心な眸、悲しみに沈む眼やもの問いたげな眼に、なにか酔ったような息苦しさをおぼえたものでした。

たとえば、先立つ娘の頬にそそぐ両親のまなざしは、やはり落胆虚脱のおもいは隠せないとはいえ、そこには、本能むき出しの親子の感情ではなく、たがいに人間として運命を甘受しようとする優しくまた毅然とした精神が、ひそやかに流れているような気がしてならないのです。ドイツの詩人リルケはこれらの墓碑を見て、『ドゥイノの悲歌』で次のように歌っています。

御身らはアッティカの墓碑に刻まれた人間の姿態の慎ましさに驚嘆したことはないか。そこでは愛と別離とはわたしたちとは別のものからつくられているかのように、そっと互いの肩に置かれているではないか。あの二つの手を想い給え。躰は力に満ちているのに、二つの手は些かの力もなく触れているのを。これら物静かな人々は知っていたのだ。これがわれら人間のなし得る限度であることを。そのようにそっと触れ合うそのことがわれら人間のさだめであるということを。

さて、人間の歴史の最初の一歩をふみ出した「これら物静かな」ギリシア人は、愛と別離とは「些かの力もなく手を触れることが、人間のなし得る限度であること」を知っていました。

それから二五〇〇年、現代の私たちはひたすら「限度」――あるいは「節度」――を超えて欲望の無限追及に明け暮れています。核エネルギー、宇宙開発、そして臓器移植……。

生を謳歌し死を隠蔽し、生を延長し病いを排除してきた現代文明――。とはいえ、フィリップ・アリエスも『死と歴史』で言っていますように、「それだからといって生が拡大したわけではない！」のです。

とするなら、あるいは現代を救うのは、現代が否定してきた「死」を見つめ直すことかもしれません。だから、たとえばアメリカの精神医学者ロバート・リフトンも、「死に接して、それから生きている人々のなかへ再びもどっていく」（『現代、死にふれて生きる』）ことを説いているのでしょう。

日本でも近ごろは、脳死論議をきっかけに、死や病いをめぐる話題が日常的に取りあげられるようになりました。「生と死を考えるセミナー」といった催しが市民レベルで開かれたり、総合雑誌が「死を想え」という特集を組んだりするようになりました。こうした風潮が、一時の流行ではなく、イデオロギーの時代が終わりコスモロジーの時代が始まる転換期の慥かな鼓動として静かに持続していくことを願いたいものです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com